

ゲオルゲ
ホーフマンスタール

George
Hofmann
Stahl



ゲオルゲ
ホーフマンスタール

世界名詩集（全26巻） 8 ゲオルゲ 魂の一年／ホーフマンスタール 詩集

定価 六〇〇円

昭和四十三年十月十二日 初版発行

訳者 手塚富雄 富士川英郎 大山定一

発行者 下中邦彦 東京都千代田区四番町四番地

発行所 株式会社平凡社 東京都千代田区四番町四番地

郵便番号 102
振替東京 29639

印刷 東洋印刷株式会社

製本 株式会社石津製本所

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

世界名詩集 8

ゲオルゲ

Stefan George

魂の一年

JAHN DER SEELE

ホーフマンスタール

Hugo von Hofmannsthal

詩集

GEDICHTE

平凡社

装
幀
原

弘

魂の一年

私の多くの道のうえで

私を慰め、かばってくれた

アンナ・マリブ・オッティリエに

一八九七年

シュテファン・ゲオルゲ

手塚富雄
富士川英郎 訳
大山 定一

目次

第二版の序

7

摘み入れののち・雪のなかの巡

礼・夏の勝利

摘み入れののち

〈枯れたという……〉	富士川英郎	10	〈この梢を……〉	手塚富雄	48
〈きみら若い……〉	手塚富雄	12	〈身懐いと共に……〉	手塚富雄	26
〈しあわせを……〉	手塚富雄	13	〈きみの足もとに……〉	手塚富雄	27
〈われらは……〉	富士川英郎	14	〈きみのために……〉	手塚富雄	28
〈いくつもの……〉	富士川英郎	15	〈部屋のくつろぎ……〉	手塚富雄	30
〈二人が……〉	大山定一	16	〈いまなお誠実の……〉	手塚富雄	32
〈きみは……〉	手塚富雄	17	〈寒気に……〉	富士川英郎	33
〈わかれゆく……〉	手塚富雄	18	〈墓地の芝生から……〉	手塚富雄	34
〈僕らはもう庭へ……〉	大山定一	19	〈野をおおう……〉	手塚富雄	35
〈わたしが……〉	手塚富雄	20	夏 夏の勝利		
〈黄の石を敷いた……〉	手塚富雄	21	〈さながら新しい……〉	手塚富雄	37
雪のなかの巡礼			〈そらいろの……〉	手塚富雄	39
〈わが行手の道の……〉	富士川英郎	23	〈あなたは……〉	手塚富雄	40
			〈草地を縁どって……〉	手塚富雄	42
			〈思い起こす……〉	富士川英郎	43
			〈かなしい警告が……〉	手塚富雄	44
			〈わたしたちが……〉	手塚富雄	45
			〈ゆたかな宝の……〉	手塚富雄	46
			〈味爽の冷気が……〉	手塚富雄	47
			夜番	富士川英郎	71
			白い歌	富士川英郎	69
			結実の喜び	富士川英郎	67
			誘い	富士川英郎	65
			帰郷	富士川英郎	63
			花	手塚富雄	61
			出		
			心こもったつどいの夜々の思い	富士川英郎	60
			〈その旅の真昼……〉	富士川英郎	59
			〈館のどよめく……〉	富士川英郎	56
			Tに招かれた人々のための言葉		
			〈私が自由な鳥と……〉	富士川英郎	55
			〈見者の言葉を……〉	富士川英郎	53
			〈熱い手で遠くを……〉	富士川英郎	51
			〈私が歌いたいと……〉	富士川英郎	50
			表題と献詞		

君たちのかりそめに刻まれた影
絵も私の追憶の広間の飾りとす
るこの戯れを許してもらいたい

〈沈黙の水がとけてから……〉

富士川英郎 76

〈ひとつの幸福を……〉

富士川英郎 77

〈吊り下がっている懸灯も……〉

富士川英郎 77

W・L

富士川英郎 78

P・G

富士川英郎 79

M・L

富士川英郎 80

H・H

富士川英郎 81

K・W

富士川英郎 82

E・R

富士川英郎 83

A・H

富士川英郎 84

A・V

富士川英郎 85

R・P

富士川英郎 86

C・S

富士川英郎 87

A・S

富士川英郎 88

L・K

富士川英郎 89

L・K

富士川英郎 90

悲しい舞踏

〈収穫月の……〉

富士川英郎 92

〈花をちりばめた……〉

手塚富雄 93

〈秋の闊けて……〉

富士川英郎 94

〈歌をもういちど……〉

手塚富雄 95

〈あの乞食が……〉

手塚富雄 96

〈村の白痴の子は……〉

手塚富雄 97

〈きみたちが……〉

手塚富雄 98

〈緑の野が……〉

手塚富雄 99

〈時計の砂が……〉

手塚富雄 100

〈悲愁の夜よ……〉

手塚富雄 101

〈われわれは……〉

手塚富雄 102

〈そうだ、……〉

手塚富雄 103

〈やっと近くなり……〉

手塚富雄 104

〈うつろいが……〉

手塚富雄 105

〈あなたの耳ほど……〉

手塚富雄 106

〈わたしの伴侶よ……〉

手塚富雄 107

〈冬のあいだ……〉

手塚富雄 108

〈しのびやかに……〉

手塚富雄 109

〈かるやかな……〉

手塚富雄 110

〈川のほとりの……〉

手塚富雄 111

〈二人してあるく……〉

大山定一 112

〈山の背に……〉

手塚富雄 113

〈うっとうしい……〉

手塚富雄 114

〈おもい霧が……〉

手塚富雄 115

〈すべては揺れ……〉

手塚富雄 116

〈悲しい目的の……〉

手塚富雄 117

〈落ちつる枝の……〉

手塚富雄 118

〈冷えきった炉に……〉

手塚富雄 119

〈陵墓のなかに……〉

手塚富雄 120

〈狩猟の群は……〉

手塚富雄 121

〈たそがれの風が……〉

手塚富雄 122

〈きみはいまも……〉

手塚富雄 123

第二版の序

著者の思念に近づきえた若干の人々さえ、もし『魂の一年』のうちに特定の人と場所とを見いだすことができれば、より深い理解を助けるであらうと考えた。けれど（すべて表現をこころざす制作においては異議のないことであるが）一個の詩作品においても無思慮に人間ならびに地域の原型に思いを向けることは、避けられんことが望ましい。それらは芸術によって大きい変形をうけるゆえ、原型が何かは創作者自身にも意義をうしない、他のすべての人にとってそれについて知ることは、助けとなるより混乱のもととなるのである。名があげられるべきであるのは、作品が敬意の表示または献呈の辞として記念の意図をもつばあいにかぎられる。そしてこの詩集におけるほど「われ」と「なんじ」が同一の魂であることは稀である。

摘み入れののち・雪のなかの巡礼・夏の勝利

摘み入れののち

枯れたという園に来て 眺めるがよい

遠くの渚が ほのかに光って 微笑んでいる

思いもかけず青らんだ清い雲が

池や五色の道を照らしている

かしこには濃い黄色 白樺や黄楊つげの木の

灰色はやわらかく そよかな風が吹いている

まだ枯れやらぬ遅咲きの薔薇を

手に摘みとって 接吻くちゅづけ 花環を編むがよい

さらにこの最後の翠菊さいきくも忘れずに

野葡萄の蔓にまつわる紫と

緑の生命のいまだ消え失せぬのを
そと秋の面わに組みあむがよい

きみら若い歳月の声は　この枝々のしたに

そのひとをさがせとわたしに呼びかけたのだった。

でもわたしはきみらの前に拒絶の額ひたいを垂ねばならぬ、

なぜならわたしの愛は光の国のなかに眠っているのだから。

でも夏が燃えてアモールたちの飛びはためくとき

ひかえめにわたしの道づれになろうと言ってくれたそのひとを

きみらがまたわたしに送ってくれるなら

わたしは今度こそよろこんでそのひとの手をとろう。

熟れた葡萄は蔵にしまわれて醗酵をいそいでいる、

けれどわたしはわたしに残された夏の

高貴な畑のものを　双の手にいっぱい抱えて

そのひとの足もとにささげよう。

しあわせをもたらしたおんみに祝福と感謝をささげよう、

おんみはやすらぎのないこの胸の鼓動を、

——したいひとよ——おんみのやさしさへの期待で寝入らせた、
臨終を前にかがやくこの季節に。

おんみはわたしをおとずれ、そしてわたしは寄りそうた、
わたしはおんみのためになごみのことばを学びおぼえよう、
そしておんみがあの遠いただひとりのひとであるかのように
日々の旅路におんみをたたえつづけよう。

われらは　ここかしこ　山毛櫨の並木道の
豊かな金色のきらめきのなかを　門のほとりまでさまよって
鉄格子の向こうの野原に
回り咲きした巴旦杏を眺めた

われらは他人の声に脅かされることのない

蔭のささない椅子を求め

夢みながら腕をからませて

日脚のながい　おだやかな光を愉しんだ

かすかな風の騒めきにゆられたのか　梢から

光のしずくが滴るのを　われらは感じては感謝のおもいにひたり

その合間に　熟れた果実が落ちて大地を叩くのを

眺めては　じっと耳をすませた

いくつもの水路が注いでいる

静かな池をめぐって行こう

お前は朗らかに私の心をさぐろうとするが

風が 春のようにやわらかく 私たちを取り巻いて吹いている

地面を黄色く染めた落葉から

新たな かぐわしい香りがひろがってくる

色とりどりの自然の書物の中で私の喜ぶものを

お前は 私の口真似をして 賢い言葉で語っているが

しかし お前は深い幸福というものを知っているだろうか？

そして無言の涙を尊ぶことができるだろうか？

橋の上で 額に手をかざしながら

お前は白鳥の群を見送っている